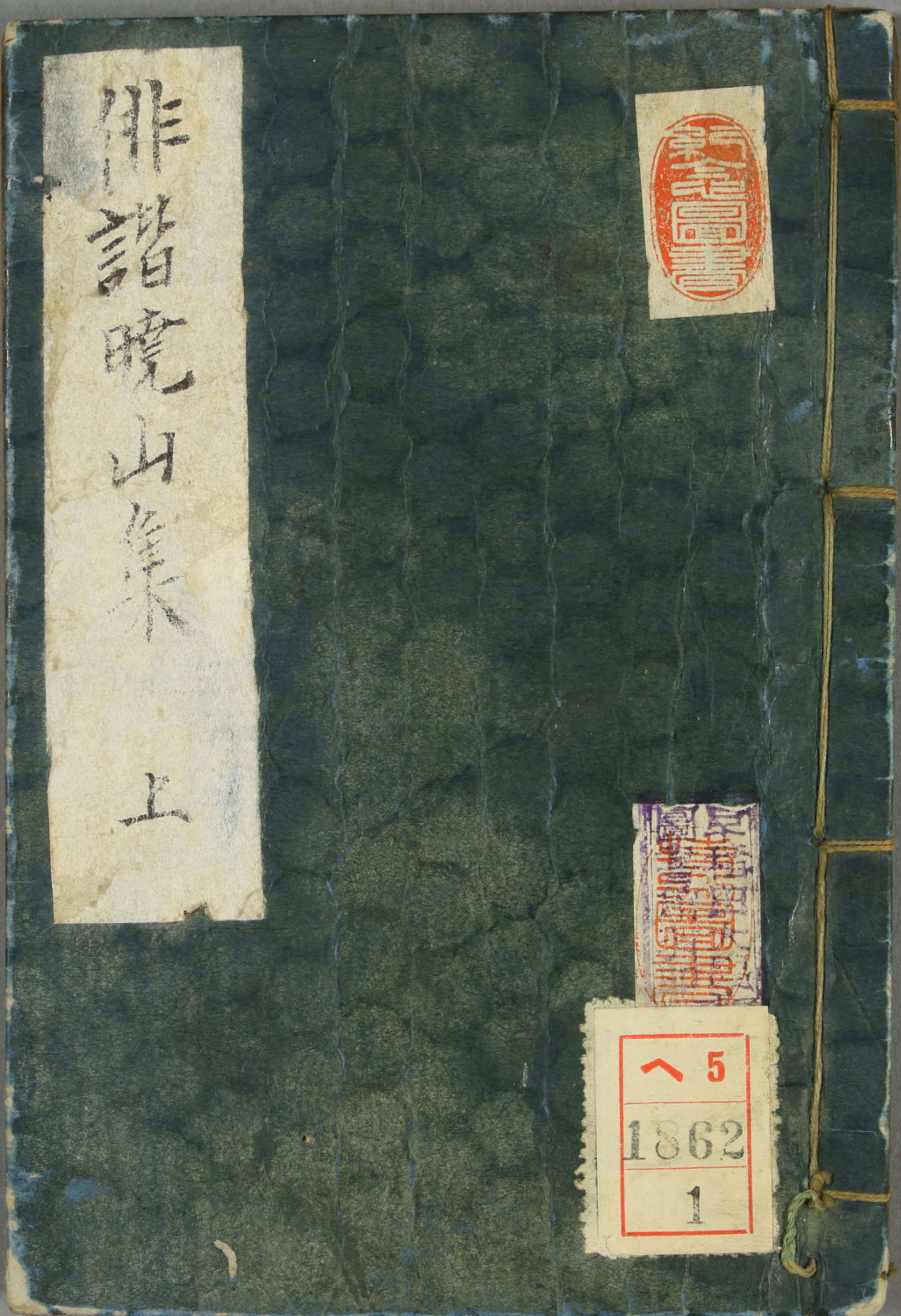
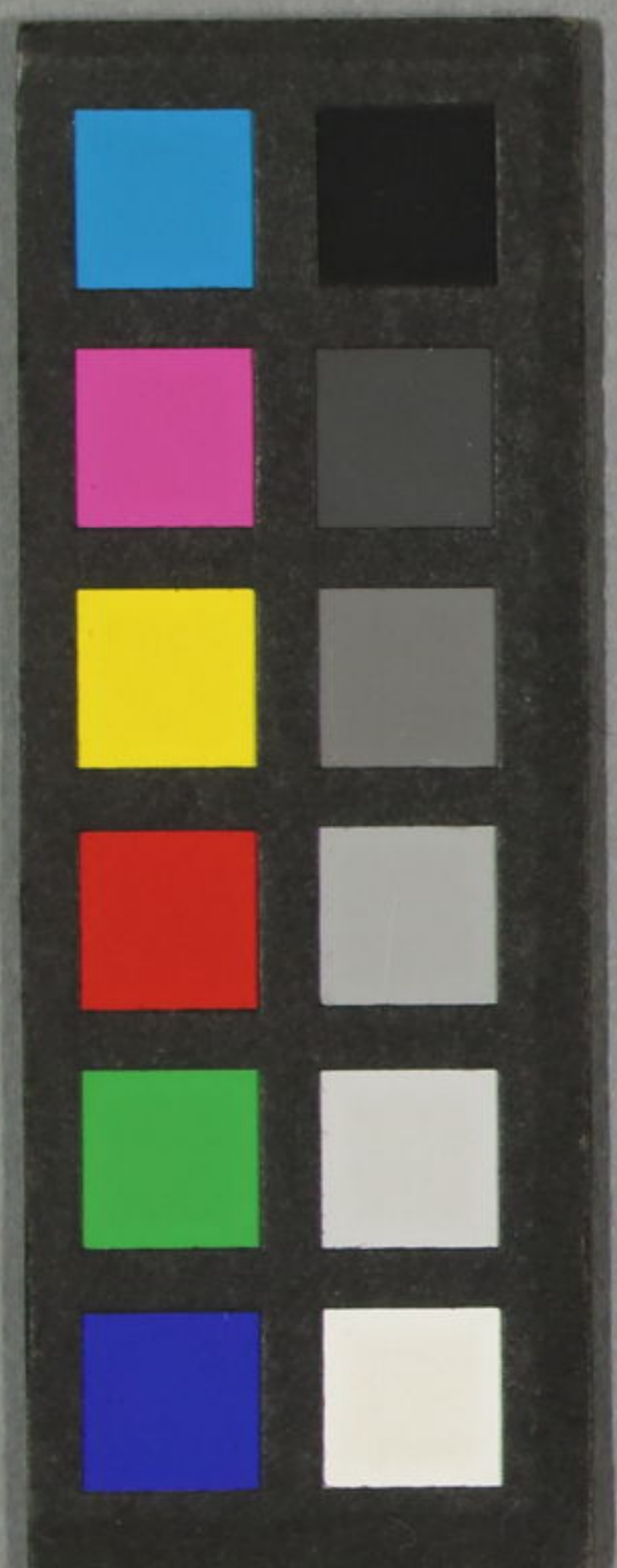




俳諧曉山集

上



曉山集序

予昔年一冊おろつて今事にして同筆に
 昔一冊とたるとさうぞうよく是を
 云ふなり。おれは師より多くおれは
 幸とてと唯一冊とけり。是を
 解くは廣くおれは。是を
 解くは廣くおれは。是を
 解くは廣くおれは。是を



唯けりさく山さくたてふまね 諸本を
 くらへて目くらましのうへに 山に遊
 集をなす人 くらへてたてし 読る集とて
 ぞ

あてふ

え縁十二に卯亥秋也

天明拾八の酉百八十七年

まふ



誂諧曉山集同録

- ① 一連歌起りて事 毎時代より川句
- ② 詠諧歌り若別より 毎連歌詠諧歌句並に
- ③ 面分る事 毎十句より回答
- ④ 種々の句も連歌としてつる事
- ⑤ 詠の句五つにけとあるもの句より
- ⑥ 第三の句 毎移るもの句より
- ⑦ 四句めつる句句成川事
- ⑧ 五句めつる句より

- 九 六句の并余と九案成りし事
 十七 九十九句と事 再長編の初と成りし事
 十 古今形篇四時教句と事
 十一 是秋賦の口傳し事
 十二 形篇成りし事 貞徳と南編と成りし事
 十三 古式連秋法の事
 十四 形篇古式法と月陰と事
 十五 是秋十種し事 再句と成りし事
 十六 同此賦とありし事

- 十六 宗祇稿の并余と成りし事
 十七 六義の編再句と成りし事
 十八 是形篇序の曲流し事 再句成りし事
 十九 是句疎句と事 再句と成りし事
 二十 是文云々と事 再句と成りし事
 二十一 是文の草と事 再句と成りし事
 二十二 是皮肉骨と事 再余と成りし事
 二十三 是道と事 再句と成りし事
 二十四 同類名別 再句と成りし事

廿一 示の病に事
廿二 示の病に事
廿三 示の病に事
廿四 示の病に事
廿五 示の病に事
廿六 示の病に事
廿七 示の病に事
廿八 示の病に事
廿九 示の病に事
三十 示の病に事

廿一 示の病に事
廿二 示の病に事
廿三 示の病に事
廿四 示の病に事
廿五 示の病に事
廿六 示の病に事
廿七 示の病に事
廿八 示の病に事
廿九 示の病に事
三十 示の病に事

五

⑤ 仮名づゝと云ふ片云用捨の事
 ⑥ けり字と云ふの事
 ⑦ 同意の事 毎月むの事 白き事 白く事
 ⑧ 奇なりやうなる事 奇なりやうなる事
 ⑨ 公陰と云ふ事 公陰と云ふ事
 ⑩ 公と賤と云ふ事 公と云ふ事
 ⑪ 出家者の事 出家者の事 出家者の事
 ⑫ 若衆の事 若衆の事 若衆の事
 ⑬ 若僧侶の事 若僧侶の事 若僧侶の事

五

⑭ 述懐の事 述懐の事 述懐の事
 ⑮ 公の事 公の事 公の事
 ⑯ 公の事 公の事 公の事
 ⑰ 公の事 公の事 公の事
 ⑱ 公の事 公の事 公の事
 ⑲ 公の事 公の事 公の事
 ⑳ 公の事 公の事 公の事
 ㉑ 公の事 公の事 公の事
 ㉒ 公の事 公の事 公の事
 ㉓ 公の事 公の事 公の事
 ㉔ 公の事 公の事 公の事
 ㉕ 公の事 公の事 公の事
 ㉖ 公の事 公の事 公の事
 ㉗ 公の事 公の事 公の事
 ㉘ 公の事 公の事 公の事
 ㉙ 公の事 公の事 公の事
 ㉚ 公の事 公の事 公の事
 ㉛ 公の事 公の事 公の事
 ㉜ 公の事 公の事 公の事
 ㉝ 公の事 公の事 公の事
 ㉞ 公の事 公の事 公の事
 ㉟ 公の事 公の事 公の事
 ㊱ 公の事 公の事 公の事
 ㊲ 公の事 公の事 公の事
 ㊳ 公の事 公の事 公の事
 ㊴ 公の事 公の事 公の事
 ㊵ 公の事 公の事 公の事
 ㊶ 公の事 公の事 公の事
 ㊷ 公の事 公の事 公の事
 ㊸ 公の事 公の事 公の事
 ㊹ 公の事 公の事 公の事
 ㊺ 公の事 公の事 公の事
 ㊻ 公の事 公の事 公の事
 ㊼ 公の事 公の事 公の事
 ㊽ 公の事 公の事 公の事
 ㊾ 公の事 公の事 公の事
 ㊿ 公の事 公の事 公の事

⑤上は切字とて小とあるも一

⑥一とよはふ小とあるも一

⑦發の小とあるも切なり

⑧疑のてちつひ小とあるも一

⑨一とよはふ小とあるも但ふとて一

⑩一とよはふ小とあるも一

⑪一とよはふ小とあるも一

⑫一とよはふ小とあるも一

⑬一とよはふ小とあるも一

⑭二字の二は折に折なり

⑮二字の二は折に折なり

⑯一とよはふ小とあるも一

⑰一とよはふ小とあるも一

⑱一とよはふ小とあるも一

⑲一とよはふ小とあるも一

⑳一とよはふ小とあるも一

㉑一とよはふ小とあるも一

㉒一とよはふ小とあるも一

⑤ 後 毎 々

⑤ 1の句は教り

⑤ ともとのふくみ

眞
し
う
ろ
う
ち
り
と
き

詠諧曉山集目錄終

一 造歌起之事 再 誹諧名別之矣

昌琢新式講尺云連歌由來^{ユライ}事并^{ナラフ}しつとてされと云流もたう
流波同答と云物と後普光園^{クハツエン}のりそむされとも委みえて下之
も歌ハ并^{ナラフ}よりにくと云義ハ伊井諾伊井冊尊くしてりて
こゝれは^{ナラフ}いふ^{ナラフ}風いふもののきかへりやまうと
めよあひわたりきりほやといふもののきかへりや
まうさわしにいあひわたり付ゆくと女神お神乃つぎ
并^{ナラフ}とて是歌なりとゆふとゆふは夏日本紀は委もはを
りのとれきの三十一字をあ一終ふて天の浮橋なりとて

云々たる姿にてもうらうらとせよとけし歌
よ其理のひきは勝あるもやう

うがもれ老くなりよけし歌

よき歌なり

いし玉のうらみは輝きあ ぬき

九連歌の舞はせしめあはれしうらうらとせよ
うらうらとせよとけし歌のうらうらとせよ
あはれしうらうらとせよとけし歌のうらうらとせよ
あはれしうらうらとせよとけし歌のうらうらとせよ
あはれしうらうらとせよとけし歌のうらうらとせよ
あはれしうらうらとせよとけし歌のうらうらとせよ
あはれしうらうらとせよとけし歌のうらうらとせよ
あはれしうらうらとせよとけし歌のうらうらとせよ
あはれしうらうらとせよとけし歌のうらうらとせよ
あはれしうらうらとせよとけし歌のうらうらとせよ

あはれしうらうらとせよとけし歌

あはれしうらうらとせよとけし歌

あはれしうらうらとせよとけし歌
あはれしうらうらとせよとけし歌
あはれしうらうらとせよとけし歌
あはれしうらうらとせよとけし歌
あはれしうらうらとせよとけし歌
あはれしうらうらとせよとけし歌
あはれしうらうらとせよとけし歌
あはれしうらうらとせよとけし歌
あはれしうらうらとせよとけし歌
あはれしうらうらとせよとけし歌

多し多し定数家傳をのりよえんやうしきしきと
 みやくれふ式月乃定もるゝ後宇多院建治二年放免
 舍後谷為相^ふ伝とるや建保十^ふ六十二年のりしに於てあハ
 式通歌の形のりしとる

二 雜情之區別之事

能指と云ふ先達も云々——此のちと云ふは、
定^{さだ}まするはもみろどら〜い貞徳の傘よ云々宗鑑
大落波と云ひ〜いとも歌と貴^{たか}と能指と唯^{ただ}のや〜き
通^{とほ}とおとりの宗鑑云々云々〜すその〜二条後深波

集示祇は所動貌彼と云ふなりと早下りて
 心名を無波と云ふ歌のりて太極大非人のむに
 無猶と云ふ歌と云ふなり以下畧又彼是無猶集のりと
 らる自義抄よ書玉ける無猶等の無猶と云ふ記て云
 漢書之無猶者隋書之隋書
 隋書之無猶者言其出成章詞不窮竭若若隋書吐酒之傳云
 大史公曰天道恢々タリ豈不大哉談言微中亦可以解紛侵盜ハ
 多矣常以決疑訛諫優施善為スモウケラフ言說合於大道淳于髡
 滑稽多矣部舍人教言陳辞雖不洽天道然令主和號

是等滑稽大意は俳諧の字にあらざるべしとて
人偏戯言と入りしものも不究今東の滑稽の
ことづゝは道一とあつて成道と云ふ又俳諧は道
してあつて滑稽義とあつて故は是と准滑稽と云ふ
利にあらざるの如言流火と云ふ水と云ふす或は
てあつてつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
又云俳諧非之也俳諧可用俳ノ字ヲ云々雖れ古今拾遺
お用俳字も不審個に拾遺するべし

五俳諧六健字七空戯八鄙俗九粗言上是ある奥義おは
いあつての俳諧奇の表裏と云ふこと今俳諧とて
いふものは對してあつてつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
いふこととあつてつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
も不究る通達と云ふことつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
あつて俳諧信云俳諧奇とてこと事つゝつゝつゝつゝ
識云俳諧信云俳諧の事あるは俳諧信云又俳諧集
あつてつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
俳諧と云ふこととあつてつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

若付し人も人ありきとて思ひしるもあはれなるものなりけり
能指も歌とてし別しつゝそのうちへは連歌の法
と定めざるもてい今も能指今のも歌は皆混^{マユ}合して来^タる
也ゆゑと彼連指の舊式應安の式とて定めしるも代
り名師詞の西^ニはとてしるひてしるはうづらうと詞と
いふもさうなりけりし能はる信と集りて一とす
そのつゝねも歌とてありけりし彼はまゝあり
と振^ハてしる能指もまたりてそと文字とて能指
も歌とてしるのめち名付て呼^コつるあはれしるもあはれ
彼宗鑑がた能指と名付能指のうとてしるひとて
早^ハくしる事付くる名といふはうづらうと能指の則も歌の
能指則も歌とて彼大勢大勢は唯^ハてたも歌とてしるも
付くるあはれしるも其のうとてしるは内^ハの信とて
とも信とてしるもあはれしるもてしるもみえしるも
とも又能指の後も能指の五^ハ十^ハの百^ハとてしるも
あはれしるも連歌連指の法はあはれしるも
うづらうとてしるも歌とてしるも能指のうとてしるも
あはれしるも

能指するもあはれしるも
あはれしるも

千種の地連くものりす也 家長
この端は白雲との月出る 宗祇

又於新田寺も歌後庭は榛のうらゝあられ

ふひものうらゝあられと成る哉 玄首

朽木穴くこり新麦虫 新巴

灯とふの夜戸のぬめけく 昌光

あゝのちはおも歌よりせし俳諧されはわらわのうらゝ

をーあもむくーうーくくく首尾むくこのあむい

そ乃伊勢ふ山田の沖宮基木田守武又山城ふのうらゝ

あゝく人あつてい通もむくせき歌能借乃乃らとあひ

守武は独吟の千句と綴りて家鑑大抵と傳へてはとれ

はあーもき歌とてあれくふらゝは應安の新式和漢のは

夜とりてそ歌と守りけりねお懐てね永貞徳の金と

うらゝあもむくうらゝあもむく草よふらゝとあもむ

皆も歌乃式目と大ひくうらゝくゆふもきとあもむ

け通れくくーはあもむくあもむくあもむくあもむ

くもーあもむ歌よふらゝあもむくうらゝくうらゝく

綴りてやあもむくく小奇徳世話とてあもむくあもむ

あふとささるるが貫るる葉集の中へは二首いえ
らひてあきなりといふなり

目くらまらなるあはれなるあはれなるあはれなる
雨ふらなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

又疎白の事とて 三

鶯の居る池の岸の春うつとねむりのつらりととれ
ふき歌よ 三

いふまは光のしらぬあつた 三

親の神の歌の秋のうへは波をまわるといふなり

けゆる花の月つらりのむす 三

けられとてとももねらうらふ奥の親の疎白とて
はあふととてこの親のうへは疎白の疎白の疎白の

一今こゝは茶とてとてとてとてとてとてとてとてとて

親のうへは相 三

白の教 三

不ろ義純 三

まを教るは偏とて 三

等より諸君とて 三

釈教也歌 九つ小川あつこしらとて 心敬

同 龍指 △ふ吹の色よりと外に廻面火 舟

衣傷也歌 五月やとわしとこりもどつ式 云仍

同 龍指 △身よりとつらふれむや母の 影蒙

迷懷也歌 世よりとつらふれむや母の 宗祇

同 龍指 △世よりとつらふれむや母の 宗祇

懷舊也歌 古よりとつらふれむや母の 宗祇

同 龍指 △古よりとつらふれむや母の 宗祇

龍指也歌 春つて生のあつらけや窓の竹 昌休

同 龍指 △春つて生のあつらけや窓の竹 昌休

祈禱也歌 けしとつらふれむや母の 昌休

同 龍指 △けしとつらふれむや母の 昌休

名所也歌 橋よりとつらふれむや母の 省指

同 龍指 △橋よりとつらふれむや母の 省指

鐘別也歌 高よりとつらふれむや母の 宗祇

同 龍指 △高よりとつらふれむや母の 宗祇

造宮也歌 春よりとつらふれむや母の 信徳

同 龍指 △春よりとつらふれむや母の 信徳

繪巻歌

雪のふかおとさの枯葉式 昌俊

同 詠

寒山拾得の拾得
△あつた葉は風に吹かれて 道弘

同 賀

△あつた葉は風に吹かれて 百とせよ 有松

同 詠

△あつた葉は風に吹かれて 三箇

雨乞歌

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

同 詠

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

同 賀

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

同 詠

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

古事歌

月ハ今頃とてふるうとて 智恵

同 詠

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

古詩歌

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

同 詠

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

同 賀

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

同 詠

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

追昔歌

月ハ今頃とてふるうとて 智恵

同 詠

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

同 賀

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

同 詠

△あつた葉は風に吹かれて 雨乞 有松

相射付といふ毒の毒を付むといふ柳と付川よ、
 漆と付るは赤いといふ射とるといふの如く、又神の心と
 是れ毒なり。名は起すといふきふといふは、

同服

卯乃むやき雲や卯まふ

徘徊良久

鯉のりふ仙樹を此花の樹

同脬

竊はうとそいふとる松う松

是れと云ふや斜とて不審にれども柳は都て
折れ付くをぬるは面白く、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
風情と云ひうらやましき歌なり

之歌教句

割るより
なりとうと
びた

問服

引水亭之樹母之里

那諸爻句

客人もつひさより参のむ

問
服

續一
明
成
三
月
春
鳥

是あやゆめさう此俳諧の二月のむもあやゆめさうの
ておさへらむけさるべし

。遠方といふといふ。東といふ。天といふ。地といふ。則ち

眼よ無垢なるやと云むりやれ味いと知る人

も歌者 かやこ 却とよ和のまゝ 宗祇

同脇 か 貴姓の死乃ちうま 玄名氏

けり宗祇流りぬる海と老なあれづのそとこ

あんと懐とのへらまゝ 迷懐乃ちととて死な

らうまゝ 一はれあ 付給ふ

非道者 初まの樂いひうゝ回五天 休 雪峯

同脇 あ の奥ハ東常 ハ公 休 松本

あゝ互は遠付とていふやけおととて色くふる人

を付といふもの音はひとてうけて何とぞうてな

と云はうへはとていふやうにとていふ海を

とていふうへとていふうへ

も歌者 初りかゝぬふまむゝ川 親面

同脇 芝 けうくれまゝ 煉乃灰水 同人

邪指 り 月とて橋うせ 心橋 永う休

同脇 紫 紫えぬま 西表石 同人

あゝと類らるゝや

はあゝと可帝とよむる 後今日の人めとてぞん

脇

うしろ時あるきり朝明

宗祇

第三

風白ふりしうひく梅咲く

同

右巻のいふもの幽玄は月出度と脇又それな打うて
はるころ第三のうとくうびくすうゆづ風情を
奏る脇第三もていふよりくもよとひなともていふ

同地錯参る

誰が舞ぞ年玉のててより舳

如琴

脇

いれを城下とまうたまめ

ふかき

第三

酒のうとあはれはうりれあ

如泉

ハてあはれもてあはれ田舎よりハていふくもてあはれ

参る

画とくくもれあはれはうりれあ

狭順

脇

うしろもろもろの心定

宣政

第三

うしろあはれはうりれあ

昌隆

地錯参る

ねととれはあはれはうりれあ

言水

服

町戸といふともろもろ入相

和政

第三

万歳がうりれあはれはうりれあ

我皇

でと覚えと不義とる人あはれはあはれはうりれあ
各別のうりれあはれはあはれはあはれはうりれあ

仍老不



四

大板
今拓

19



ぬいぬいぶくしてゐる中みづうりうきとし
 ぬいぬいの式ぬ

少時又合を過ぐべしめて通ひぬがてする

うもてやみてもひくくさゆふよりぬくを思ひ
はてのみ吟味するが今ならぬわくを

四
五
六

昌隆

昌純

ひきかへは、又、めでたき通ふ、分りて、威情、わく、は、むと

いふに、不^レ教^ハを^レ第^ニ云^ハい^レれ^ル付^ハの^レめ^テと^ハ也^ハ、初^ニ

のむづさふら

寬
每也

第三

おろかなる花の香りの如き

宗長

能借参る

うらゝめや花の香りの如き

宗長

脇

ひびくところてうきもの人

我人

第三

今日のむねを胸さうりうき

同人

あゝいそぎとて同じくよき疑字下の如き

あゝいそぎとて同じくよき疑字下の如き

あゝいそぎとて同じくよき疑字下の如き

無

引ておぼろけの如き

畠山

第三

おぼろけの如き

組白

能借参る

七穴や目もくちりけり

穂心

照

年一りじりハ舞ハゆるき

翠心

第三

松搖中一めとてわが校の如

角孫

もあゝ顔めくはるすうき名二つと只ハ二字

うきとてき歌の如き

⑦四白り事

おぼろけの如き

おぼろけの如き

おぼろけの如き

卷之四

コシ
スナキ

ガ

四

3

子

3

2

三

三

人子

一

礼

7

刻

五

司

卷之四

龍精第三

か蛇呼^ニ天^ニ鶴毛^ニ杖のききき

畧^ニ依^ル之

同四白め

おそびづくもれくひん

伝^ニ徳

第三

久々音とあなまむ梅らひ

畧^ニ依^ル之

比^ニあ^ニた^ニめ

まれき免^ニ乃^ニく蛇やぬは

紹^ニ也

龍精第三

葉のむ異いそいのきき

畧^ニ依^ル之

同四白め

ひそろくも草一のけ

玄^ニ煙

第二

まの氷^ニけ^ニあ^ニぬ^ニあ^ニひ^ニあ^ニて

畧^ニ依^ル之

この目^ニあ^ニめ

は^ニあ^ニら^ニれ^ニあ^ニら^ニり^ニし

昌^ニ也

龍精第三

新^ニ酒^ニと^ニ依^ルる^ニも^ニあ^ニら^ニり^ニし

畧^ニ依^ル之

同四白め

腰とこれつて板^ニのきき

松^ニ運

あ^ニら^ニれ^ニあ^ニら^ニり^ニし

う^ニら^ニれ^ニあ^ニら^ニり^ニし

や^ニら^ニれ^ニあ^ニら^ニり^ニし

て^ニら^ニれ^ニあ^ニら^ニり^ニし

ふ^ニら^ニれ^ニあ^ニら^ニり^ニし

は^ニら^ニれ^ニあ^ニら^ニり^ニし

も^ニら^ニれ^ニあ^ニら^ニり^ニし

⑧五白め

五

五

日五なり

後上聲臺字乃枋而スギ

永常矩

右の白き思ひていふも味ひをいふなり

此の白き思ひていふも味ひをいふなり

つとていふも味ひをいふなり

法は新は角と法とと教へていふなり

あそくも味ひをいふなり

わいふも味ひをいふなり

とありていふも味ひをいふなり

わいふも味ひをいふなり

法は新は角と法とと教へていふなり

あそくも味ひをいふなり

わいふも味ひをいふなり

とありていふも味ひをいふなり

わいふも味ひをいふなり

法は新は角と法とと教へていふなり

あそくも味ひをいふなり

わいふも味ひをいふなり

十。七。白。五。白。なり。ていふも味ひをいふなり

[illegible]

高き十の山とて、秋波に散る雲常速懐く舊衣傷
 風は又内裏の少侍言へる名故中が残りける事
 世の事めり世の事かどむすくも物也い述懐あるを
 清茅引純くまごの細みかくじこゝと云おすべしと値
 ま歌よりくのごとく古まけ越^{ツエダキ}と守りあるといふと
 今時緋指ぬれ裏へうつやいあやいろくのあわけ来
 りともと出すくろくわぬるく裏へうつてなるを
 つるも彼はたれ河と物次とたぐひと名同あり和^{ワカ}める
 人此名固し知ずとよと事いゆれば又古人夷犬黒ハ
 祓神を紙に袖われ面よしてとてとてとてとてとて

土古今作者決牙不同

夏

撫子や五右衛門の落し子

夏嘆ハ事又新ラウラハ新公

頤紅の板とるなり五野外

登うか又米つゝと嫌ひのふれし

水車

翡翠のみまけをあらわす

紙軍會や長くしてゆくのふ

打水より先ぬぐ

る平の行や菊根表客信水

垣のむくのまゝに
禁

步若抽鼻息而一一衣衣云

高金卿卜味若清少水

外乃花や去道は志抄紙の如

益々酒の心まゐるゝゝ

世に於て道ありて

漢書文選曰凡所處外

蒼系小孟一
酢味嚼小

守

求貞德

永
重

穿板

大坡
宗園

吟笑

大坂
万曆

永
大

四月

主

羅心

卷之六

采卜

友也

葉友元

吟笑

伏陽
方白

若くはわづらひつゝとて事あるは
 祇もや火をかゝる家煙の青
 魂糸り婦へけしひもせうり
 ち砂の史婦張せん玉手は
 石出て飛ん付し内面小
 糸巾より襟エリはくちよや安き
 船は坊々辛味人の内面小
 定くごまごま月々も落葉が
 櫓くくして笑やうる奥の
 うと痛や海の人ある事とし

高やけとくた、きぎりひの形
 仮橋やうりてよとてせれ作走
 味あふくくれぬ飯のくくけ
 袖肘も地ふよ　りひのくくせ、
 長いとく断ちきくと武井の
 ひくくくく焼野とくくくくく
 脩よりけり、くぬるかきと外
 ある年の頼よとくや隣乃南
 も雨やまぬくくく　里
 人の乳はくくくくく　橋の

大坂 伊丹 母殿 大坂 伊丹 母殿
 伏陽 伏陽 伏陽 伏陽 伏陽 伏陽
 萬輝 萬輝 萬輝 萬輝 萬輝 萬輝
 吟笑 吟笑 吟笑 吟笑 吟笑 吟笑
 雷子 雷子 雷子 雷子 雷子 雷子
 方白 方白 方白 方白 方白 方白

用卜
 常 友元
 平 言水
 永 重佑
 戶 三永見
 大 力磨
 永 玄來
 萬 友元
 十人

止

卷九

③或人問賦稅之事

聊不忘舊義而已之 是又強勝の病之

於ふりて

[illegible]

叔父と書留家近賦地と定むぬとハる中三賦地と
字とくハる人あれ今一巡回て証し賦地と云ふと
まうのり

賦地篇

山何 何路 何木 何人 何船

以上五尚く内
宛て用く

朝何 夕何 何何 何何 唐何 何何 何何

唐何 下何 何何 何何 何何 何何

何何 何水 何金 何不 何田 何草 何鳥

何鳥 何文 何鳥 何鳥 何衣 何文 何地

何世 千何 五何 以上新儀

○又二字あり 二字通音 二字中界 四字と下

界未し但一字露れ賦地ハ近代も何何と歌ハ毎交

出用之むる其奥二字通音ハ下賦地ハ何何と歌ハ取之

○一字ありと云ハ 日と火 蚊と番 名と菜 一字列の歌

○二字通音と云ハ 毛と縄 麦と細 水と罪 以上

讀二字名成る神字類ハ それと通ス

○三字中界と云ハ 唐と紙 萬蒲と雨 桂と唐

此外二字中「畧」字「下」畧おるに「は」交準と
又「中」の「中」二字「後」の「ま」おる事「は」或「ハ」部と
「ハ」中「は」と「ハ」部「ハ」と「ハ」部「ハ」と
「ハ」部「ハ」と「ハ」部「ハ」と「ハ」部「ハ」と
「ハ」部「ハ」と「ハ」部「ハ」と「ハ」部「ハ」と

又「中」の「中」二字「後」の「ま」おる事「は」或「ハ」部と
又「中」の「中」二字「後」の「ま」おる事「は」或「ハ」部と
又「中」の「中」二字「後」の「ま」おる事「は」或「ハ」部と
又「中」の「中」二字「後」の「ま」おる事「は」或「ハ」部と
又「中」の「中」二字「後」の「ま」おる事「は」或「ハ」部と

又「中」の「中」二字「後」の「ま」おる事「は」或「ハ」部と
又「中」の「中」二字「後」の「ま」おる事「は」或「ハ」部と
又「中」の「中」二字「後」の「ま」おる事「は」或「ハ」部と
又「中」の「中」二字「後」の「ま」おる事「は」或「ハ」部と
又「中」の「中」二字「後」の「ま」おる事「は」或「ハ」部と

け外^外事^事世^世語^語詩^詩文^文法^法などと教^教ふ^ふは^は時^時賦^賦也^也
元^元やう^{やう}習^習ふ^ふ事^事は^は是^是の^のま^まに^にし^しる^る也^也

古来々捉姦の母死賊物二つよりとて不取なるとい
ふ柄とる姦の母人乃字不中取之樹人も二人
といふとてなるを準他之より三つよりとて賊物と同命
但し舊式乃ち歌なり表十句あるが姦のいかかりハ
ろくろりろぬすト也餘語もむ同ド

⑤ 盜賊之事

貞徳流俳諧の賦物とて、次々とむづいそれを
 あつとせしす。其不遇といふ人ぞ、一語も
 とほりなきごとく、もうねと云ひぬ。その同は二首
 の三つ、其連歌の初より、うゑとて賦の字よりあへ發
 り、よく日十句百句、こころの明くとて賦の字よりあへ發
 る。よく日十句百句、こころの明くとて賦の字よりあへ發

思ふに義之排借は舊式ありて歌式へはと
借りたるを其秋は舊式よりつづけの賦也とれよ
及とも義之二字は其名も秋めは百句の句とよ
れ時と賦也とれよ及想懷舊は又名号「追昔あり
此秋は賦也とれよ或は多想的連想懷舊は秋をく書く此
義ハ前にも秋の所よりく其連想は秋と瑞作よ
きよとく及又類のかくくは名も秋をく書く賦也
とありて類とくくは排借よとめてハ排借の二字則
類之類ハ排借とく秋と書く其秋ハ及想懷舊に
ハ「追昔あり」の賦也とれよ及くくは
の五甫ありてハ排借は賦也とれよ其秋ハ其自傳云
西とくは「追昔あり」の秋は排借とく今則「秋は排
とありてハハ別くは名とありてハ別くは名ハ排
借の二字と排とくハ排借は又その秋ハ排借と
それハ彼夢想懷舊は又名号「追昔あり」其時ハ
及想ハ排借懷舊ハ排借とく其是ハ排借ハ二字
排ハ「追昔あり」の秋ハ排借とく其是ハ排借ハ二字
排借ハ賦也とありてハ類ハ其秋ハ排借とく其是ハ排
借ハ排借とありてハ類ハ其秋ハ排借とく其是ハ排

歌師集の事能借と興りつゝ能借を二寄と
も下書すことと

右くくハ同義と解ぐるんてさうかたも席
は随ひく賦わらやあゝぐあべー又能借も歌に
強ひあつてもさうーやうが能借も出せ和歌のこ
りゝ肩^{ツキ}あれた席^{セキ}はつゝさうとのかくが意地と
さうとて又さうつゝて氣色づゆーこの情と
あゝさうさう度通て賦わの字さう用意してさう
あゝさうさうやうさうさうさうさうさうさうさうさう

義もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
五ヶ以下小賦とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
てさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
是能借はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
能借も賦わの字さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
能借もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
能借もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
可準は但又一字さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

一、新式と云ふは、
 同本山清水寺よりありて今とて武国と用ひしもの
 是より一、武国との舊式より云信は清水寺に於て云今よ
 用ひしものありて一、永禄の舊式より云信は清水寺に於て云
 信りたり信巴より云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云
 一、同式又中納言為者卿佐治よりありて一、信光園抄
 政良基公二系より應安五年より改め書加へ給ふと新式と云
 建治二年より云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云
 宗道宗初より相誤し給ひて享徳元年より云信は清水寺に於て云
 信光と云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云
 勅より信道院よりありて文龜元年より云信は清水寺に於て云
 書加へ給ふと新式と云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云
 是今より新式今案より用ひしもの式は但武国より云信は清水寺に於て云
 信光と云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云
 信光と云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云
 文龜元年より云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云
 元禄十年より云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云
 年より四百廿二年より云信は清水寺に於て云信は清水寺に於て云

（一）

（二）

例より事一ヶ所を執つてあらうあつてもあつて船槽舊式
まゝとせんといふも今に船槽はきさの新式に改ま
彼是ゆゑに事用する意にて連歌に舊式の船と用
捨して事用するもいふごとく用する意ありと
あらばある人にも改舊式に改め船槽といふも
捨と加へくたせよう一答をむくは支那既年にお
ゆりゆればと船とあらうとく一と改め

⑤ 船槽式の用捨

○表十の但第一事として各處の船槽をき改はす

○各處不厭作し表。○名處のりあふ但 此のりあふ

○同季隔五の中 中一は此ノ事 則ち 不る之と後二は不る

但常連すといへるをき改め船槽といふを改め
定めゆゑに同季なるをも定むるべし中よ他の事
と入るはなるをき改めとせりゆ改めとくを改め
例も改めお裁極め船槽といふと方あへんとい
用改め

月を毎季同作船各隔七 常ノ事 月を毎季同作
船ホセウ 又常の船槽といふも改めとせり各別

卷五十一

明子履是

常れど泥より水敷よりありと
他より水也の國随ひて月之

卷之三

[illegible]

[illegible]

大やう連歌乃十辨と定めおれさうおとこに
あつた是は準一しや辨結もくうふ

幽玄辨連歌

袖と名に名乃三所を

。まふうう人ぬるおれまとも

。こもにほをうひー奥に

。かきつとふじりうぞびとふ果て 叔母

叔母とあふまて人の親とて

。疾く風はうらとてうひ

叔母

辨結

移のうぶわとふもあつた月

△沈水よことうるはれまうさ

殊妙

長三辨

。うぞううにあひすづ

。ま雨よりあつたひのよとて

順美

。つれなまうれは根や二つとせ

。日とあひくたうと果のよとて

因乃

。はやうあつたは居あ

信照

辨結

。あつたう一回いふとつた

有公解

△八十乃姥酒めちのこまげよ

系 如泉

○秋さのひるまきと夕ぐれ

○ゆくてけ川よい里もあー

秋風

○ぬーいおあーの船さか川

○あー海より津のこころは思はれ

秋風

○是よりいぬるふよあやえ

○あう後れ世のねの夕ぐれ

信玄

△風と水見て思ふこころは

系 和及

濃解

○水やのりうてあーいん

○あざれいふふふさるものね

信照

○そより人の数ぞいんあー

○このこまげいん乃あうて

秋風

○もろあーいんあうてあうて

○まげが店はそのこま

信玄

如解

○泉水流る限のこま

△唐のまげを並まはねひて

系 幸佐

如解

○月をむろね求あういん

。身と捨る業は店や夕煙

信照

。まゝあはれにうらなひをて

。船もあはれに水にうきくち

吹芝

船借ハ

乗るまに綿と糸とをわく

△鳥をとりあへず煩うと人かて

一糸
あま

一糸作

縁にいろ袖のうらたふぬ

。何ゆゑのうらたふぬ名のき田川

信照

。まの目殺しなるそまふら

。あまのそまふら一糸といふは

救世

。あまのそまふら一糸といふは

。あまのそまふら一糸といふは

十佛

船借ハ

△あまのそまふら一糸といふは

一糸
相和

寫古抄

。あまのそまふら一糸といふは

。あまのそまふら一糸といふは

順美

。あまのそまふら一糸といふは

。あまのそまふら一糸といふは

良川

。あまのそまふら一糸といふは

絶倫

○絶とぬぐいおも川つみ

其角

つとくと糸はききあひ

○たぬ後と顔とがくうじ

其角

強力

○う矢ぞ國のちきりあ

○かづまねと田とらうじ

因乃

○うぢびよりとあひうじ

○いぞは休代スーき宮ね

救母

○金ちとくはまぞみうじ

○老はぬうらなひのふとて

十佛

絶倫

○お月や海つらうとあひ居て

主

△その明日つらうとあひ居て

其角

○但しかれと休廻る休の國をうらむとあひ居て

○かみ遠とあひ居てや定家卿とあひ居て

○年の中はあひ居て月とあひ居て

○あひ居てあひ居てあひ居てあひ居て

○あひ居てあひ居てあひ居てあひ居て

○あひ居てあひ居てあひ居てあひ居て

○あひ居てあひ居てあひ居てあひ居て

のちめいしきく人へは決りなきれども幽玄と心得ゆるは
 大やうれぬちのそへちと違ひらうけりやうち人の幽玄
 とあるはつとて用とせしや大なる人のかゝる
 ぬれ決りやいづとてけしひのえんあるよりいづとて通じ
 人とあつと別つて諸人の事やけしかさめなる人ある
 べしといふといづとていふはわづらひくやうけにけりやう
 ち人の五尺のあやちよ水とけりていづとていふは幽玄
 といふをいふ

又司山作、を而神、宅海作と云ふ。長る作と云ふ。
わに分れ出する者あり人——け長るキ祈と云ひ敬拜と作

[illegible]

文はみえぬが性よらうとあつたれういそへる
 都より下へとぞむけ侍今しくいふは戀ふふたへうを
 包さすて人ごとあふ別あうす御又別あうと念
 うとてとていふもの面をう風情とのべ月とてふ其
 ちとてとていふとていふとていふとていふとていふ
 つつぬを初めいふ字のようとていふとていふとていふ
 するつとていふとていふとていふとていふとていふ
 一とていふとていふとていふとていふとていふ
 そろいふとていふとていふとていふとていふとていふ
 通ひゆれはあふとていふとていふとていふとていふ

白の味もいふやまにまじりてやうくもわきま
 事くまのいふはよのむじひの西むらと空ち廣く
 ととりしじとあくと堪終れん天日材オケハニとけのが
 ねのれつとはひよめぐす大さあるはく虚室ウツロのせ
 くらいつくはく花ハナのちものあやうはゆるす
 とそねくそちキ新しう又の堪終不堪と刀じん
 ぬまん此間ち作しうはふとけてあふへち一葉い
 さいく各別オノオノの妙もる人さうとく右詩をす
 うまそいゆる白のあやうは長きくゆると
 強作オホサツ桂鬼作定家卿の骨オサとなして餘情ヨレイとこれ

ある勢に但此方とせらるゝとあらは公めくは是れ其の病
ありあられとぞ世にあらす骨^{ユツ}髓^{スエ}の病とぞ專^{モウ}にせらる
あるのつゝと外にあらるゝと此病と名てらるゝ大
裏大極度の病はひりあてしうせぬやうに
とらうとそ又彼に故郷有母妹風俗^{フツ}無^ム人^ニ看
雨^{アメ}魂^{タマ}をひひと泣く言のまゝとて人のあつた
係のふゆはうと十代の内鬼^キ拉^ラ作^サは入^イるやとぞ奇^キ大
の事とて此中と定まつ別ておぼえありとあらんじ
通は只^{ただ}とて第一とて人々をさや
依^よ此^こ十^じ解^{かい}此^こ律^{りつ}と書らうとてや奇^キとていふあり

めや連歌他^た借^かとて作と名て句と名てはるゝ
とて知^してはるゝとて人々をさや
とてさびとてとてとてあらはとて外に^{ほか}あらはとて
事^{こと}のつゝとて此^こ中^{ちゆう}論^{ろん}不^ふ改^{かい}を其^{その}中^{ちゆう}に
とてあらはとてとてとてあらはとてとてあらはとて
のちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
ひりあてしうせぬやうに^{たか}とてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
甘^{かん}白^{はく}されとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

味りどしどしめけるゆへに白くしては味きとらふもかな
 らず事ある人々一茶の味もあつたのよふに味はれと
 着せしむるも一茶の味もあつたのよふに味はれと
 るがしむるも一茶の味もあつたのよふに味はれと
 とち人もの味も一茶の味もあつたのよふに味はれと
 味ひと味はれと一茶の味もあつたのよふに味はれと
 のうへも味はれと一茶の味もあつたのよふに味はれと
 又西民の味も一茶の味もあつたのよふに味はれと
 白くしては味きとらふもかな
 と味ひと味はれと一茶の味もあつたのよふに味はれと

軍法とあるよふに敵の味も一茶の味もあつたのよふに味はれと
 白くしては味きとらふもかな
 身法とあるよふに敵の味も一茶の味もあつたのよふに味はれと
 白くしては味きとらふもかな
 事とあるよふに敵の味も一茶の味もあつたのよふに味はれと
 白くしては味きとらふもかな
 大 近江の味も一茶の味もあつたのよふに味はれと
 白くしては味きとらふもかな
 右の味も一茶の味もあつたのよふに味はれと
 白くしては味きとらふもかな

あひこにけりともを何と云はん

賤とむの貴と枯く

宗祇

あや 電乃咄の面片タタレ

峰の居所跡に雲の氷々々々

同

待時不乃別と之方

宋長

きくもんのをいとけし

之依

あつていふふふふふふふふふ

人言其語

嘉祿

あや 玉とふきくろいちとふれ

秘蔵らく 蔵より手摸り

同

云々調凡いふ云々所

宋長

あひ 金ふにふりおのり

拾遺作
之陽年作云

此作

このてふは歸るやまの雲

字振

あや

たのむしあはれおすのほを

えんせ作

肩袖をなぐりて後おろして

字振

あや

たのむとぬくはてしなく

三三作

かきおろしを髪とくさして

字長

あや

水着ふりうろくをうろく

三三作

かき入るを道中捨てた袖ねく

同

あや

くろくねくをうろくをうろく

一葉作

風をふきまきし袖ねくをうろく

字振

三三作

けりうろくをうろくをうろく

字長

あや

きこくをうろくをうろく

三三作

くろくをうろくをうろく

字振

あや

けりうろくをうろくをうろく

三三作

くろくをうろくをうろく

字振

三三作

たのむとぬくはてしなく

字長

あや

きこくをうろくをうろく

三三作

くろくをうろくをうろく

字振

三三作

三三作

あや

きりぎりしとよきうたをた

おま

うれうれとまことおもひに

え作

あや

しらぬうらひりやねん

あや

とふとふとれきりうたのき

え作

あや

ねとぬきうたのきり

あや

けずとふとふとまこと

え作

あや

あやうれ玉の枝にわん

あや

けずとふとふとまこと

え作

あや

あやうれ玉の枝にわん

あや

あやうれ玉の枝にわん

え作

あや

あやうれ玉の枝にわん

え作

あや

あやうれ玉の枝にわん

あや

あやうれ玉の枝にわん

え作

あや

あやうれ玉の枝にわん

あや

あやうれ玉の枝にわん

え作

あや

あやうれ玉の枝にわん

あや

あやうれ玉の枝にわん

え作

あや

あや

賊

卷之四

卷之四

是ちのちも風乃のよきなりやすすん

○賊

[illegible]

出る目へは方なりとみよきなり

七

是に也どもかとりかたうするを海やふんを
とてうみふしをきいて又排港よりなる

死より生ぶ
虫をうへ
いそ
友とも獲

罕
秘

毛也計ひやくふり俚しハナ作ハナまゝさうじりふたねえとて

國を以て抱き入て居る大元日

系
去貞

是れ多く也と集むるに
作の者^カや柳と云ふ字は

救法^マ 釣人柳 桤^マ 松^マ 楓^マ

是等六也多く云集つると云ふうもて賊の字はつゝ

と云ふあつて縁エよつてひてゆ多くを集つるやう

ふんとうくわんしんおふくとい^{アキハ}味ひと^ニ見^ミおゆるべ^ニおずし

但大井目乃句も物やゝて居ると他4と云ひやうと

ふよふふけふふふふふふふふふふふ

おびへきねあまじくして大類と云てぬは似たるんやなりたよ
 俗に云ふは似てゐるをそれなりずらんやわつゝあるはさうな
 らうとぞしてありていひくづらうならぬと云ふなりて
 ねは似るとも世俗はお方と云ふつと云ふは同じのこと又貫之
 川舟と云ふは似てお方はけさうこれ雲のおきていふいはが力
 とおれあまじく人起くと並におひける茶屋をとお方といふこと
 はなからうや実家の流したくゞ舟ともいふの字などいふて
 大車といふものなりをどめてもべいの敬傍都の川をいふ

下
紅糸塵にまじり宮居

是を被起と爲すはひるをとりて教は塵相のこ
はとちて川のやうに流るるやとはち非流といふ

五
あやまり人月が夜半の雲
渚元

則二本目本おのりるし下ふきの美子とせ愛をぬ
 と仲代乃美万代はたけづる類ひとそりてうひあむる

いふあふぐー但是あひ言ふれさるゝは無くていふさ
彼類とみてぬはいさふたふさふさあふさふさふさふさ

ともかえど此方と奥^{ウチ}なり

魚
たゞ人等たゞ人とは一物と見てこそ物とよせてくつべたところ
道に就ては人とは一物と見てこそ物とよせてくつべたところ
事とさあがらぬたゞ人等たゞ人とは一物と見てこそ物とよせてくつべたところ
事とさあがらぬたゞ人等たゞ人とは一物と見てこそ物とよせてくつべたところ
事とさあがらぬたゞ人等たゞ人とは一物と見てこそ物とよせてくつべたところ

又家祿云風は奥の三ヶ所^{ミナ}也又た^{タカ}とて風うくられ
奥へゆくこと又云此にうくの奥なるとて巻^{マク}べさる

漢書

梢 エスエ

扱ヒキ

夢

一

貞隆

以

地

頤

音

與

あ

75
37

六

高

50

子

3

242

٢

三

子

報

酒

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

一

とく

のぬちのうたにうはよほにぬくとけいふん
又意根のちとらふ

他ちひはとや真なりま

いふに活字してわきこひ初めあつてさぬとくともわ

の頌 いふに奇毛持云頌ハ義威徳形容成功而告神明也又

又頌ハ誦と稱讃と云ふといふにハ初めは故頌といふに云ふ又

宗祇云頌ハ容と誦と容ハ王者の威徳と云ふなりてかじりて誦

とて世とかりて非なることといふ又頌ハ誦とて云ふに云ふに

誦ハ誦とて云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに

あつていふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに

も様とけけるまのこころの

あつていふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに

非れもる指やけのち家様

と云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに

けりまひゆるべしや彼もよとてけりまひゆる

代はまよふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに

是あやけひもすへんねれとていふに云ふに云ふに云ふに

右義乃かきとていふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに

言ふはこれとていふのつていふは、
中より情は吐き出さるるも、
何れも其よりつていふは、
ていふとていふは、
あはれなきとていふは、
りりめいなる情を相とていふは、
と得風賊は、
のりひとていふは、
理世接氏とていふは、
奇とていふは、
只此道は、
死のつとていふは、
和合とていふは、
よゆとていふは、
さうとていふは、
とていふは、
不ていふは、
大篇序題曲流之事

の六根なく此うとなり明めゆるいふは道の序破也

○篇ハ
五文字を人々を
たずむるを
○席ハ
第二の席を
のこすを

第五、いふをもてわづかしくいふぞ

ちとれふれ事なれども敬備部の河を此に難於とこ
 あまふと見とありいて又念とれ

○篇
家と仍しんとをよきと
て比とを辛うする
○序
纏るりて指要大し
いなりと松りたるは

曲造立て家形出来たる所

○流 成乾してうろくを

ふれ奇人此五つとわくらめてけうやくと云但

齊よりて五文字と座の句にていふの事なるを

五又五より下にありすも五とぞを歌ふるは

よと同一先連語なりといふ事一連歌八家見之

惟今下の曲流の心あはばとの白と山篇序類より

云々
とく
まへ
曲流の
ふりかへ
て

都より云々とぞ

救

黃

頻



五

10

信照

序

かゝる歌や五月に、いふまじりやうとあはれ
あき澄のやゆといふあり、衣をはきててあふく
もあつ序・奇又中、こゝやどめたるもあり
なみをうたはせむざりけし衣を田のふもとへ
梅飼船ならんをもとむ武虎半次流川の夕やとのそ
あきの類しき秋も是より奇と嘆いてやお白よづで
序としてゐるものなりもし一詩に古人の白よとい風評
ひびくとて筑波集あはれといふことなり

債頭

ふく夢久のうてしをえり

因乃

○旅よその病前のごきようは
何とぞたゞうきうきにあらば

傳

人にかゝる世の中

是の類あるをいふは、
あつては彼等の中よりと
いふことなり。

前句題句曲流

今白
換獲なりし刀此より爲る

溪石

毎吟にり弱とあへん

△適度く^{ムゲ}下^{コエ}又^{コエ}裁^{コエ}み^{コエ}ち^{コエ}の^{コエ}山

空
不
下

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

廓クハへそと右卿若人

百部

普

今とてふにちぎく月の夜よ

△ニぬゑゝニ島乃羽子

氣

をちかつ秋とてて秋とて

△くらげの骨も口よむやうえてくち衣

大坂

倉祐

其の類もあつてさや連歌と加指との白くは
 し多下れ句よゆづり下のるまゝなりどしてどのかふえ
 ていへおそふてうらなひくちをてふわふ感懐者
 逸^{イッ}つろふてうらなひ但奇よし曲と二所よりどりて
 おろく席の何やらある知とまて一箇とせるとこ
 は毛惜ありあきとつくとむ得ゆるべし経
 もも席正流通として先席より後への因縁^{インエン}辟^{タト}玄翁と
 従^{トキ}ては正家として純^{ジュン}の服するはとも末より又流通が
 とて其後の徳とうゆぐゑあがりといふ人々ある

事されど奇の篇序題曲流は相あるや詩の
 紀美抄合とて之を此篇序題曲流は句と率
 句と續けゆる時は結の得てとて之を之の
 曲流の流ありては篇序題は云々なりとて次は又曲流の
 公とては婆ありてなりとてなりとてなりとて其次は篇
 序題の流ありては二句とては云々なりとてなりとて
 篇序題は皆此連歌の流ありとてなりとてなりとて
 題二句流きたるは又曲流の流ありとてなりとてなりとて
 一節の流ありては離隔とてなりとてなりとてなりとて
 のどく流ありとてなりとてなりとてなりとてなりとて
 なるやなりとてなりとてなりとてなりとてなりとて
 なるやなりとてなりとてなりとてなりとてなりとて

立親白疎白乃事

此事連歌俳諧各別なりと云ひて之を分るる事
尤も妙なる事なりと云へり其歌俳諧各別なりと云
ひは歌俳諧各別なりと云へり此は歌俳諧各別
なりと云ひて之を分るる事尤も妙なる事なりと
云へり

徘徊と親の平懐の作は不堪を智の^{ヒカ}まを耳にや
一疎白けいもく遠きとらそちな、とらち。
事くくとぞ定ぬる舟のどくいのちがう月夜は他
女のどくいのちにうけしまへていふあひひあひ
みどいつり又も歌徘徊きどくいの水精れ^{ツツミ}は^シ夜^ノ痛と
とらちいふもくあひうもくうとらちいふもく
れれ、^{ツツミ}肩尾^ノうりあひうとは出いていふもくは
れとくあひと耳にうりいふもくうりいふもくは
あひうもくあひと白落着くのひくうりいふもく

親の作はあひうりいふもくうりいふもくは

○親白
うりいふもくうりいふもくは

片墨のうりいふもくは

うり

○疎白
うりいふもくうりいふもくは

うりいふもくうりいふもくは

あひうと親のうりいふもくは

あひうと親のうりいふもくは

あひうと親のうりいふもくは

あひうと親のうりいふもくは

是あがむるうねりまゝといふは、
白く曇りてくたふるゝて、
あゝ時帝^{セウ}と陰月^{イニ}も陰時帝^{イニ}相違^{サウ}とて、
雲はれりうらゝと上^ウに色^{イロ}なり、
月やうのうらゝと、
身^ミのトをうらゝと、
かゝるうらゝと、
いふは、

あがむと月と様やういふ

も有るやうにうらゝと

月とあがむと様やういふ

も有るやうにうらゝと

あゝは、
とよら月うらゝと、
とみえ、
うらゝ月うらゝと、

③ まの草と

まの草と、

色歌

融書

船
楫

望
松風

おれやまのこ平とてお

色歌

（綴）きて、八胡日と西に光り

家紙

排捲

△山吹や蠟燭の如水を

穿
杞
子

建秋

○ 烟風とびきてうきと波

張

排諧

△元日天知日女辰始

丹徒吟笑

ふくもやけひゆるんまれどもお二種どごころ
可といろくの風情とあらざるおれど書あつてよは
まらばえきまぬ事といつる姿とまゝくみゆか
しめしめよほされどちやいへくおもふなうしど
よくよむにありけりともいふべきありきこの世出
でる句毎^{ごと}よけに寝れぬとりもくともよめる今もど
れと海やよからゆづぬの夢より人へ一ねとど
八十一のありともからゆづぬまぐすこ

